

## 意見発表要旨 [ 第2回高水協議会 (H17.10.16) ・ 第3回高水協議会 (H17.11.17) ]

会員番号	氏名	流協名	要旨
1	小松 好人	浅川	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 浅川では、ピーク流量計算（貯留関数法や使用するパラメータ等）は問題ないものとする。</li> <li>・ 算出されたピーク流量から基本高水を選択する方法を提案したい。</li> <li>・ 浅川では基本高水は正規分布しており、その選択は 1/100 相当のピーク流量の最大値～平均値の間で決定すべきであり、結果としてカバー率 50～70%程度が妥当なのではないか。</li> <li>・ 洪水の発生確率は降雨と違い 1/100 ではない。</li> </ul>
2	小沢 均	砥川	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 貯留関数法解析モデルにおける一次流出率、飽和雨量の捉え方に問題がある。</li> <li>・ ダムサイトでの流量観測結果に基づき流出解析を行うことは問題。</li> <li>・ 流量観測の精度、水位から流量への変更に問題がある。（流出量が小さいものみのプロットである）</li> <li>・ 砥川では伏流水が影響している。</li> </ul>
3	内山 卓郎	浅川	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今までの県土木部、国土交通省河川局、河川工学の学識者等は信用できない。</li> <li>・ 基本高水は実測データとの整合が重要である。</li> <li>・ 雨量データが極めて貧弱であり、しっかりとした雨量データから基本高水を見直すべきである。</li> <li>・ 流量データは皆無に近い。</li> </ul>
4	大西 健介	上川	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 上川WGの活動状況について（12月までに意見集約、提言を出す予定）</li> <li>・ WGでの検討を踏まえ、協議会での検討テーマを提案したい。</li> </ul> <p>（対象降雨量の算出、降雨パターンの選定方法、森林保水力や地質構造特性を踏まえた流出解析、基本高水の選定と住民合意、長期的なデータ収集と再検証など）</p>
5	野原 繁美	薄川	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国の基本高水の定義は、年超過確率が実降雨量、実洪水値共に 1/80（薄川の場合）になるような洪水値の下限値としている。（p 32）</li> <li>・ 薄川の基本高水流量 <math>470\text{m}^3/\text{s}</math> はけた外れに大きく、<math>40\text{m}^3/\text{s}</math> が妥当である。</li> <li>・ 確率は論理の世界であるためデータをしっかり集めて求めなければ、とんでもない値となる。</li> <li>・ 貯留関数法での降雨パターンの引伸し率が大きいと基本高水も大きくなり、引伸し率が小さいと実洪水量に近くなる。（平均的に）</li> <li>・ 算出に使用している流量測定地点での水位データもおかしい。</li> </ul>

			<ul style="list-style-type: none"> <li>・貯留関数の諸定数の決定に使用する実績洪水のハイドログラフの値が、3～4倍に水増しされたものを使用しているため、流出解析の結果は3～4倍以上の値になっている。</li> </ul>
6	馬島 直樹	角間川	<ul style="list-style-type: none"> <li>・S28 から角間川を見てきているが、堤防、河道について過去の経験を生かした良い工事を行っている。</li> <li>・歴史書等から角間川の水害（1950年）は堆積物により偏流がおり堤防の側面に当たり決壊した。溢れたのではない。</li> <li>・堆積物による偏流を抑える工事を行っていけば洪水は防げる。</li> <li>・流域協議会で議論しているパラペットは必要か疑問である。</li> <li>・千曲川合流点付近は、千曲川による内水の問題である。</li> </ul>
7	常田 長時	薄川	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本高水は絶対値でなく、適宜見直しが必要である。</li> <li>・雨量データが現地とかけ離れており、貧弱であるため検討が必要。</li> <li>・基本高水流量は、基準点の流量、支川の流量配分の決め方、雨量の測り方等に問題があり、基本高水の算出には、流域での雨量観測、目的の場所での流量観測でのデータを使用することが必要。</li> <li>・河川改修後の基本高水の検証が必要。</li> <li>・大河川から定めた基本高水算出方法を小河川（合理式を適用される河川）に適用するのが問題。</li> <li>・小河川には合理式を用いた方が貯留関数法より誤差は少ないと考える。</li> <li>・行政の説明責任、資料の開示が必要。</li> </ul>
8	清水 馨	上川	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上川の流域面積は336km<sup>2</sup>と広大であり、降雨量は流域の5箇所の雨量観測所にある直径20cmの筒に入る雨の量で決めているが、正確性については疑問である。</li> <li>・上川の流量は、諏訪湖の釜口水門の湖面の水位計のデータから按分して流量を決めているが、巨大湖の水面は絶えず動いており、誤差が大きいデータを使っている。さらに基本高水の算出方法もおかしい。</li> <li>・ダム計画の計画雨量304mmより多い345mm（S34 17号台風）の降雨があったときにも、河川はほとんど増水しなかったという疑問が地元から出た。</li> <li>・火砕流の堆積大地で空隙率5割から6割と多い。ほとんどの雨しみこむ。この地質で出水率0.6は大きすぎる。地域の森林状況等考慮すべき。</li> <li>・洪水モデルの選定も実情に合わない。またモデルの降雨は災害引き起こしていない。</li> </ul>
9	五味 春人	砥川	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高水協議会は、2002年に長野県が示した「枠組み」に示された「基本高水の再検証」の一部をなすものと理解する。</li> <li>・貯留関数法そのものの評価はいったん切り離し、9河川の基本高水の算定の経過と結果をおさらいし、高水の扱いが各河川・流域の特性を正しく反</li> </ul>

			<p>映したものになっているか評価してみたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本協議会の様な住民参加の検討が全国で行われ、河川砂防技術基準も改訂されている。それらを合わせて、この協議会の性格や位置付けをもっと鮮明にしたらどうだろうか。</li> </ul>
10	佐原 香	砥川	<ul style="list-style-type: none"> <li>・河川に流入する水を検討するよりも、河川に流入する前の流域を総合的(地質・土壌・森林・土地利用・開発状況等)に見た流域保全対策を検討する必要がある。</li> <li>・森林状況は戦後と比べると成長しているので、昔の基本高水の係数をそのまま使うのは適当でない。整備された森林と放置された森林では流出量が違うので重視する必要がある。</li> <li>・扇状地や天井川では伏流水を検討する必要がある。漏水係数も考慮すべき。</li> <li>・河川砂防技術基準(案)の流出係数は、山地・水田が0.7、畑・原野が0.6となっているが疑問である。山地にも地質により違いがあるのではないか。一つ一つの流域を個別に見る必要がある。</li> <li>・机上計算でなく実際の流量で再計算する必要がある。流量「<math>m^3/s</math>」はイメージしにくいので、同時に水位で表す分かりやすい工夫をしたらどうか。</li> </ul>
11	中沢 勇	浅川	<ul style="list-style-type: none"> <li>・雨量から流量を算出する方法は、多くのデータの積み重ねがあって出来ることである。僅かなデータで基本高水を決定することは問題。</li> <li>・基本高水流量の検証、計画や実行の段階でチェックをしていないのが問題である。</li> <li>・自然災害の全体を眺め、何を重点的に取り組むかを考えていくべき。</li> </ul>
12	小林 峰一	上川	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本高水の値は高いほど安全であるという考え方は疑問である。</li> <li>・人命を最優先して考えた場合、過去の災害において実際に流れた流量程度が妥当である。</li> <li>・治水安全度は、一生のうちに1、2回は災害を経験する程度の発生頻度でよい。</li> <li>・災害を経験した人が地域にいて、危機感を持ちながら暮らすことが人命を守る上で大切なことである。</li> </ul>
13	宮坂 正彦	砥川	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事業の目標値となる基本高水という考え自体には問題はない。</li> <li>・100年確率の雨により算出した予想流量が果たして100年確率の洪水であるのか疑問である。</li> <li>・砥川では1日雨量から2日雨量に変更したが、基本高水が変わっていない。流入河川の基本高水は変更できるのに合流の基本高水を変えないのはダムのための数字ではないか。</li> <li>・基本高水を算出する貯留関数法は古い計算法である。分布型やタンクモデルでの算出や検証をすべきである。合理式での検証には意味がない。蓄積</li> </ul>

## 別紙

			<p>されたデータで再検証をすべきである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>基本高水の決定の際に住民も関与できるようにし、選択肢を増やすべきである。</li> </ul>
14	塩原 俊	上川	<ul style="list-style-type: none"> <li>100年に一度の降雨ではなく、100年に一度の洪水を問題にすべきではないか。</li> <li>河川砂防技術基準にとらわれて論議していくと袋小路に陥ってしまう。基準を離れた形で別の観点から基本高水を見直してみたらどうか。</li> </ul>
15	花岡 今朝男	砥川	<ul style="list-style-type: none"> <li>森林状況を考慮し基本高水流量を決定すべきである。</li> <li>雨の降り方から流量が予測できる方法の検討を行い、住民に分かりやすい目安や手法を作成し、防災に役立ててはどうか。</li> </ul>
16	山岸 堅磐	浅川	<ul style="list-style-type: none"> <li>基本高水流量は財政問題、環境問題等を総合的に判断して決定すべき選択の課題である。</li> <li>浅川の基本高水流量について、実測降雨量の最小のものが最大の流量となっていること、異なる仮定、計算法にもかかわらず、1976年と1994年に計算した結果が同じということ、森林の状況が反映されていないことが疑問。</li> </ul>
17	田口 康夫	薄川	<ul style="list-style-type: none"> <li>実測値を使って今まで出してきた基本高水流量を検証すべきである。</li> <li>実測値と言っても場所によって雨の降り方が異なることを認識した上で話を進めていくことが大切。</li> <li>昭和30年代と現在では治山力が向上しており、森林の効果（保水、土砂流出抑制）を評価すべきである。</li> <li>統計的に確率処理することが、地球規模の長いスパンの変化について全て説明できるのか疑問に思う。</li> </ul>
18	宮入 貞徳	浅川	<ul style="list-style-type: none"> <li>浅川は扇状地であり、過去の土石流によって形成されており、遺跡の上に砂利がのっている。</li> <li>基本高水流量は、土石流を考慮した、余裕のあるものとして検討して欲しい。</li> <li>過去に県内の多くの災害現場を見ているが、被害は土石流によるものが多い。洪水時はただ単に水が増えるだけでは無い。</li> </ul>
20	武田 けい子	浅川	<ul style="list-style-type: none"> <li>実測値を用いて住民に説明することが必要である。</li> <li>自然現象を数字で表すことには、多くの観測データが必要である。</li> <li>過去に水害になった時の洪水で流出解析すべきである。</li> </ul>